

助け合いの精神を大切に

女優 紺野 美沙子

KONNO MISAKO



©Shinji Shinoda / UNDP Tokyo

## PROFILE

東京都出身。慶應義塾大学文学部卒業。1980年、NHK連続テレビ小説「虹を織る」で人気を博し、テレビ、映画、舞台などで幅広く活躍。2010年3月末から語学番組「ギフト～E名言の世界」(NHK教育)に出演。98年より、国連開発計画(UNDP)親善大使を務める。著書に自身の途上国訪問についてつづった「ラララ親善大使」(小学館)など。

★著書を5人の方にプレゼント! 詳細は38ページへ

国連開発計画(UNDP)の親善大使のお話をいただいた時、突然のことで「本当に私でいいの?」という気持ちでした。それまでは、途上国とは無縁、英語も苦手。でも人生一期一会、何かのご縁と思って、お引き受けすることにしました。

親善大使として、初めて訪問した国がカンボジアでした。行くことが決まって、まず私がイメージしたのが「地雷」。テレビで見たことはあったものの、実物を目の前にして、そして、地雷の被害者の方々と話をし、一気に「現実のもの」として身近に迫ってきたんです。どこか遠い国の話ではない、同じ地球上で起こっている私自身の問題でもあるんだと一。ショックでした。

ある時、エイズで両親を亡くしたガーナの少年に言われたことがあります。「親善大使さんが来てくれたか

ら、僕たちはもう大丈夫!」。この子は今日の前で、私に助けを求めている。でも、私がこの国にいられるのは1週間程度です。現地に残って、彼らと一緒に汗を流して生きていくことはできない。でも思ったんです。私には、彼らの現状を日本に帰って“伝える”ことができると。彼の言葉は、『ラララ親善大使』を出版するきっかけにもなりました。

初めてアフリカに行くことになったとき、正直少し不安がありました。地理的にも遠いし、歴史も文化もまったく違う。でもガーナで、とある村の婦人会の女性たちに会って、そんな思いは一気に吹き飛びました。本当に明るくて、優しく、近所のおばちゃんに再会したような懐かしさを感じたんです。「人間どこにいても同じじゃない」。ただ、取り巻く環境が違うだけです。

一方で、途上国には助け合いの精神が深く根付いているような気がします。「困った時はお互いさま」。現代の日本で、失われつつあるものではないでしょうか。私自身も、毎回彼らからたくさんのことを学んでいます。

「貧しい国」の状況について理解することは、容易ではありません。でも日本の子どもたちには、日本がいかに恵まれた国であるか、そして、私たちの暮らしも途上国の資源や人々に支えられて成り立っていることなどを、自分の頭で想像できるようになってほしいなと思います。

現場で青年海外協力隊の人たちに会うたびに「日本の若い人も頑張ってるじゃない!」とうれしくなります。これからはもっともっと、若い人が新しい発想で、国際協力に自然に取り組んでいってくれるような社会になればと願っています。